

書評

Jeffrey Sachs

The Price of Civilization: Reawakening American Virtue and Prosperity

安藤浩一

1. 著者等について

本書は国連等で活躍している、途上国経済等の建て直しに関わった経験も多い経済学者、ジェフリー・サックスの最新著作である。米国を模範として途上国の危機を救ってきたことを自認する著者¹⁾が、米国自身の危機や病について取り上げた点が興味深い。米国人自身の手による責任感の表れ、自省の書とも言える。健全な知性とその期待される役割を果たせるかという観点から、分析と提言を行っている。

本書の見方については意見が分かれるかもしれないし、処方箋に関する有効性も賛否があるであろうが、明確な意志をもって全体像を描き、具体的な政策パッケージを提言している点で、一読の価値があると考え、詳細は本書を手にとって頂くとして、以下では本書の内容を紹介し、筆者なりの読み方を示したい。

なお、書評執筆中に早川書房から邦訳が出版され²⁾、タイトルは「世界を救う処方箋」と意訳されている。直訳では「文明の対価」となるが、意識としては「米国富裕層の責任と彼らへの課税」もあり得たろう。

1) サックスの手法は、一気に市場経済化を押し進め、債務免除や多額の援助により、急速に経済を立て直すことを目指すものである。ロシアでは必ずしも思い通りには改革が進まなかったが、成功も多いとされる。

2) その他、邦訳があるものだけでも、研究書として Global Linkages (邦訳「グローバル・リンケージ」) 啓蒙的な著作として The End of Poverty (邦訳「貧困の終焉」)、Common Wealth (邦訳「地球全体を幸福にする経済学」) 等がある。

2. 本書の概要

著者の基本的な見方は、誤った診断に基づく誤った政策及びそれを行う政府の機能不全が、米国の窮状を招いているというものである。ただし、米国経済と米国民の基本的な健全性は維持されており、これらが正しく政治的な意志として結集されていけば、事態が改善に向かっていくことは可能としている。それはひとえに、米国民の自覚と行動にかかっている。分配面で格差が開きすぎたことも妨げとなっているので、富裕層への課税により格差を和らげ、政府の役割を果たす財源も入手することで、政治的判断と政策支出の改善を行うことが有効であると提言している。

前半の第I部「大崩壊 (the great crash)」では、今の米国で何が問題なのか、そしてそれがいかに急速に進行してしまったのかが示される。2章で米国の窮状、3章で基本的な正しい経済政策のあり方とそれとの乖離を解説する。次いで4章と7章で政治と国内政策の問題、5章で社会の分裂を説明する。経済に関する現状分析は第6章であり、特に経済的な要因としてのグローバリゼーションの影響を論じる。

8～9章は心理的な要因について詳しく述べている。8章が第I部、9章は第II部に含まれ、中毒的な消費等がもたらす悪影響と、その解決策が述べられる。ガルブレイスの「ゆたかな社会」を彷彿とさせるが、その行き着いた先をレポートし分析していると言えよう。マクロ経済分析等とはやや異なる、一種の精神論がかった内容になるが、ことの深刻さからして言及せざるを得なかったと説明している。

後半の第Ⅱ部「豊かさへの道 (the path to prosperity)」で経済・社会的な観点から解決策となる政策とその実行方法を示すが、経済をどうするべきかという具体的な処方箋は、10章～11章である。特に11章は、タイトルとも関連して、財政についての分析がある。12章では、政治改革ないし行政改革について述べている。

以下では主に経済分析の内容を中心に、本書の基本的なメッセージを確認しよう。

3. 現状認識と経済分析

本書の現状認識は、この30年程の間に、急速に米国の経済や社会が悪化したというものである。具体的には、米国民の満足度や幸福度が下がったこと、失業率の高さや貯蓄の低下、公共投資が不足し格差が拡大していることを説明する。その原因として、政府の役割の後退・グローバル経済への対応の失敗・国民の結束の乱れ、を挙げている。自由主義が行きすぎて政府が問題解決の役割を放棄している。格差拡大を主な原因として富裕層と企業が政治を支配することとなった結果、政府が十分機能してないと分析している。

失政の起点となった大きな要因が経済のグローバル化である。近年の新しいグローバル化は、IT化の進行も伴い、それまでのグローバル化と質的に異なるほど、密で速度が速いものであり、それにより新興国との戦いに敗れ、少なくとも短期的には損害を被り、その痛みは未熟労働に大きく発生した、と分析している。その対処にあたって、政府がリードした産業政策等が有効であったはずなのだが、産業政策や雇用政策等の長期的な実物経済の改善策を取ることを怠り、金融政策のみで対応しようとして失敗した。インフレが抑えられたのは、IT革命による生産性の改善ではなく、海外からの安い物品の流入によるものであったが、その点を見誤ったことも影響した。グローバル化の副産物としての格差の拡大が、正しい政策対応を可能にする意見の一致も失われた結果、政府がうまく機能しなかった。そのため、米国の多数の

国民が不満を抱くようになってしまった。以上がサックスの分析の大きな流れである。

4. 本書の示す解決策

具体的な解決のための処方箋を示しているのは、10章及び11章が中心である。

10章では、目標をいくつか示した後で、具体的な経済政策の案をいくつか示して、目標とするべき水準やスケジュール感も提示している。なぜその水準がよいかという点には特に言及はないが、目標を数値で決めて目指すということ自体が、効果的であろうという意味と受け取れる。むしろカラ元気ではいけないので、実際にそれを実現出来そうかという点に議論を集中している。方策としては、先例から学べるという認識で、北欧諸国やオーストラリア等々の成功事例を見て、そこから学ぶという議論のスタイルである。多くの具体的なかつ領けるヒントはあり、試してみる価値はありそうと思わせてくれる。具体的には労働市場の改革、教育の改革、医療の改革、軍事費の改革など多岐にわたる。全体として、公的な負担の役割、公共投資の役割を強調するような改革を志向している。

11章は本書の中心となる章であり、増税の必要性を強く打ち出して、10章に示したような方策を実現すべく、財政的な問題を解決するための方策が示されている。大胆にまとめて言えば、増税の必要性を二つのことから主張している。一つは当面必要な財政赤字のファイナンスを行うためであり、今ひとつは今後の民間向けの公的投資を増やすためのファイナンスを行うためである。そして、多少の支出の切り詰め等ではおよそ間に合わず、どうしても増税が不可避であることが力説されている。合わせて、富裕層の累進税制を過度に緩めたことの弊害を主張しており、彼らへの課税を増やすことを提言している。

5. 本書を巡る論点と評価

米国は日本と比較すれば、「大いなる安定」

の中で、資源にも恵まれ技術革新や競争も活発で、リーマンショックからの回復も早く、比較的うまく運営されているようにも見える。レーガノミックス以降、強力に推進されてきた規制緩和等の保守的な傾向の政策、自由主義的・市場主義的な政策は、一定の成果は挙げたのではないか。累進税制の緩和も、インセンティブを促進した面はあったとは思われ、要は程度の問題である。これらはある程度認めれば、サクスの一方的な指摘はやや言い過ぎであるということになる。

課税の強化については、財政赤字の解決には当然必要としても、それにより公的支出を強化することが、米国の長期的な競争力ないし生産性の改善にどの程度有効だろうか、とも思われる。政府が問題解決に役割を果たすのが一つの解決策になるとしても、集めた税金が正しく使われるように政府を律すること、市場経済の活力を邪魔しないことが必須条件であり、その点の困難さは必ずつきまとう。また、貯蓄の現象を分析しているが、そこへの海外からの資金の流入をどう考えるかという視点が無い。サクスの経験を考えれば、米国がこの点でどのように振る舞うべきなのか、分析を聞いてみたかった。具体的な方策の中で少し気になったのは、現状で大卒以上とそれ未満の間で所得格差が開いていること等を見て、処方箋として大卒者を多く作り出すことを説いていることである。日本では進学率の上昇に伴って誕生した多くの大卒者が就職難にあえいでいるという状況がある。

経済の不調もあるが、効果は教育の内容次第とも言えるかもしれない。

以上のようにいくつか気になった点はあったが、評者としては総論として概ね共感出来た書物であった。国民の幸福度や満足度の低下という現実を目の前にすれば、長期的に重要な教育や労働、研究開発に関する国家的な戦略について再検討すべきという主張には異論は少なからう。また、特に財政問題については、日本の状況への示唆もある。日本はより平等で平坦な社会であり、資源が乏しくより脆弱かつ経済が不調という違いはあるが、財政危機の問題は日本ではより深刻であるし、政治不信とそれに伴う機能不全も起きている。今のうちに増税等で改革を施し、早めに対応しておくことは有効であろう。

サクスの著作でいつも感心させられることは、現実の経済に深い関心を持っていること、分析を行った上で具体的な目標を伴った処方箋を示すことである。経済学は学問として自己目的化してはならず、現実の経済の改善と社会の進歩に向けていかなければならないというスタンスが感じられる。タイトルの「文明の対価」は、過去からの蓄積の上で富や豊かさを享受している人類が、それに見合う責任を果たさなければいけないことも意味していると思える。程度の違いはあるにしろ、本書の処方箋に共感する富裕層・知識層も多からう。これぞ「文明の成果」であると誇れる結果を残したいものである。